

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑤

天理日本語学校設立のねらいと社会的背景

今回は、前回(2025年1月号)で触れた天理日本語学校を始めた理由について、当時のフランス社会の文脈を眺めながら見ていきたい。

天理日本語学校は、「勤労者のための夜間の日本語学校」として始まっている(天理教ヨーロッパ出張所 1992:111)。ヨーロッパ出張所の記録や鎌田親彦の説明によれば、日本語学校を始めた理由は大きく分けて6つになる。それを筆者の言葉でまとめるならば、①日本に関心を持つ人々との接点づくり、②長期間にわたる人間関係の構築、③教員の社会的立場と信用、④社会人向けの本格的な日本語学校の不在、⑤天理大学選科日本語科からの教師派遣の期待、⑥フランスにおける日本文化受容や日本語学習需要の高まりである(以下は、別に注記のない限り、鎌田 2013、および鎌田親彦へのインタビュー、2014年11月11日を基に記述)。

①については、日本語学校は「最も真剣に日本との接触を希望している人々を最も広範囲に吸収できる」(天理教ヨーロッパ出張所 1992:111)というねらいがあったとされる。これは、日本語学校に限らず天理日仏文化協会の活動全体にも言えることであろうが、殊に日本語の習得を目指すほどの人であれば日本への関心も強いであろうという考えが前提にあるように思われる。

②は、「長期間にわたる人間的なつながりが期待できる」(同上:111)ことである。これについては、言語を習得するには何年もかかることが関係している。前回に、お茶やお花では趣味や習い事で終わってしまうため長続きしないということに触れたが、まさにその点を克服することのできる選択肢であったと言える。

③は、教師の持つ社会的立場の高さが関係している。鎌田曰く、教師はたとえ年齢が若くても、また社会的地位がなくとも、教室の中では先生と生徒の関係で立場が上になることが出来る。これは、同じ国出身の者同士の間ではそこまで意識されないかもしれないが、フランスでは外国人である日本人教師にとっては、社会的信用を得る上で大きな意味があっただろう。

④については、当時のフランスにおける日本語教育機関の状況が関係している。鎌田の回想によれば、当時は日本人子弟向けの塾と外国人向けの個人レッスンをしている所が数カ所あったのみで、民間の本格的な日本語学校はまだなかったという。実際に、1970年発行の『世界の日本語教育機関一覧』を見ると、当時フランスで日本語教育に携わる機関は7カ所あるのみで、その内訳は、パリ日仏協会(1カ所)、日本の高校に相当するリセ(2カ所)、そして現在の国立東洋言語文化学院(INALCO)を含む高等教育機関(4カ所)である(出版文化国際交流会 1970:64-65)。高校は当然ながら、高等教育機関についても、日中に仕事をして夜間に日本語学習をするような社会人には向かなかったであろう。また、パリ日仏協会には受講者が35名いたとされるが、教師数が3名で学習時間も週4時間(時間帯は不明)と限られていた(同上:

64)。そういった点からも、民間の社会人向けの日本語学校の設立は、フランスの日本語教育機関の中でも新たな試みであったことが窺い知れる。

⑤は、教員の供給源に関わる点である。天理大学の選科日本語科は、1958年に天理大学の附属教育機関として設立された日本語教育機関で、その目的は諸外国から来た留学生への日本語教育であった。修学は1年ないし1年6カ月の課程となっており、その後1981年に天理大学別科日本語課程として改組されてからは、修学年限が2年となっている(天理大学附属おやさと研究所 2018:668、677-678)。鎌田は、この選科からの教師派遣を見越していたとのことであるが、1971年5月の開校当初にはまだ派遣がなく、その年の2学期目の10月に1人派遣されたようである。選科からの派遣は、単に教員の数を確保するためだけではなく、教壇に立つ教師が天理の人間であることで、そこから生徒との人間関係を築いていくことがそのねらいにあったようである。

⑥は、フランスにおける日本文化や日本語学習への関心の高まりである。フランスにおける日本文化受容の端緒は、古くは1860年頃から1920年頃にかけてヨーロッパで興隆したジャポニスムまで遡ることが出来る(馬淵 1997:10-12)。鎌田によれば、日本語学校を立ち上げた時期は、フランスで禅仏教が流行り始め、日本文化全般の受容が高まり始めていた時期であったという。実際に、禅については、フランスに禅を広めたことで知られる弟子丸泰仙が1967年に渡仏し、翌年にはヨーロッパで最初の禅道場をパリのモンパルナス近辺に開いている(呉 2019:82)。また、日本語学習については、日本経済の発展に伴いフランスでも需要が高まりつつあったという(天理教ヨーロッパ出張所 1992:112)。実際に、国立東洋言語文化学院では、1970年～71年の年度に560名の履修登録者がおり、その数年後の75年～76年の年度には1,128名と倍増している(細川 1987:70)。その他にも、日本のアニメやマンガ等が後の年代に広まっていくが、天理日本語学校の立ち上げの頃には、これから高まっていく日本文化や日本語学習への熱がすでに肌で感じられていたのであろう。

[引用文献]

- 鎌田親彦「天理日仏文化協会創設の経緯」天理日仏文化協会関係者の集い講演原稿、2013年10月25日。
- 呉春美「フランスと禅―弟子丸泰仙の足跡を訪ねて―」『神奈川大学史紀要』4号、pp.59-87、2019年。
- 出版文化国際交流会編『世界の日本語教育機関一覧』出版文化国際交流会、1970年。
- 天理教ヨーロッパ出張所編『天理教パリ出張所20年史』天理教ヨーロッパ出張所、1992年。
- 天理大学附属おやさと研究所編『天理教事典 第三版』天理大学出版部、2018年。
- 細川英雄『パリの日本語教室から』三省堂、1987年。
- 馬淵明子『ジャポニスム―幻想の日本』ブリュッケ、1997年。